

中国南京市余村における歴史遺構・潘氏祠堂の文化的価値の

再認識に基づく持続的地域活性化

千葉大学融合理工学府創生工学専攻 博士前期課程3年（助成時）

李 敏

1. 研究目的

本研究で取り上げる祠堂とは、中国において、宗族の祖先や社会に多大な貢献をした人物を祭祀するための建造物である。潘氏祠堂は、南京市に現存する唯一の徽派建築の祠堂であり、余村においても唯一残存する祠堂である。本建造物は宗族の結束と文化的アイデンティティを象徴し、地域社会において重要な役割を担ってきた。そのため、文化遺産としての保護と復元において、重要な意義を有する。

本研究は、「潘氏祠堂」を取り上げ、文献調査・現地調査に基づき、同祠堂のハード・ソフト両面における文化的価値を明確化するとともに、得られた知見に基づき、当該地域における今後の内発的な地域活性化に向けた指針を導出することを目的としたものである。

2. 研究実施項目

以下の研究実施項目を遂行した。

- 1) 文献調査：祠堂に関する先行研究を整理した。また、潘氏祠堂に関する『江寧県誌』『潘氏宗譜』『余氏宗譜』『余村志』などを用い、余村や潘氏祠堂の歴史、自然地理、社会文化に関する資料を収集整理した。
- 2) フィールドワーク：江蘇省南京市余村において現地調査を実施し、潘氏祠堂の空間構成や装飾の詳細を記録。住民約70名に対しインタビューを行い、祠堂の利用実態や祭祀の流れを調査した。
- 3) データ整理・分析：収集した写真や住民の証言を整理し、潘氏祠堂の当初の構造と、その空間演出の特質を明確にした。本分析は以下の3つのステップで進めた。ステップ1：建造物の計測および古文書の確認；ステップ2：古老から祠堂の変遷や儀式に関する情報を収集；ステップ3：図面作成とインフォーマントの確認を通じた構造の復元。
- 4) 研究成果の整理・報告書作成：得られたデータをもとに、潘氏祠堂の文化的価値を解明し、研究成果を論文としてまとめた。

3. 研究の成果

1) 潘氏祠堂の面積と建築様式

筆者らが復元した建造当初の潘氏祠堂の平面図、上面図、正面図、および断面図は、図1に示した通りである。潘氏祠堂の奥行は24760mm、幅は16450mmである。潘氏祠堂の様式は、当該地域で、「三進」と呼ばれるづくりである。「進」とは、南から北に向かって連なる建物内部の空間配置を指し、一進が「門堂」、二進が「享堂」、三進が「寢堂」と称される。

2) 潘氏祠堂の内部空間の構成要素

潘氏祠堂の内部空間は、門堂や享堂、寢堂、天井、側廊などで主要な空間が形成され、それらは「本堂」とも称される。また、補助的な空間として「廂房」がある（図2）。頁数に限りがあるため、門堂の例を挙げて説明する。門堂は祠堂に入る最初の空間であり、「一進」とも呼ばれ、平面形状は長方形である。奥行5980mm、

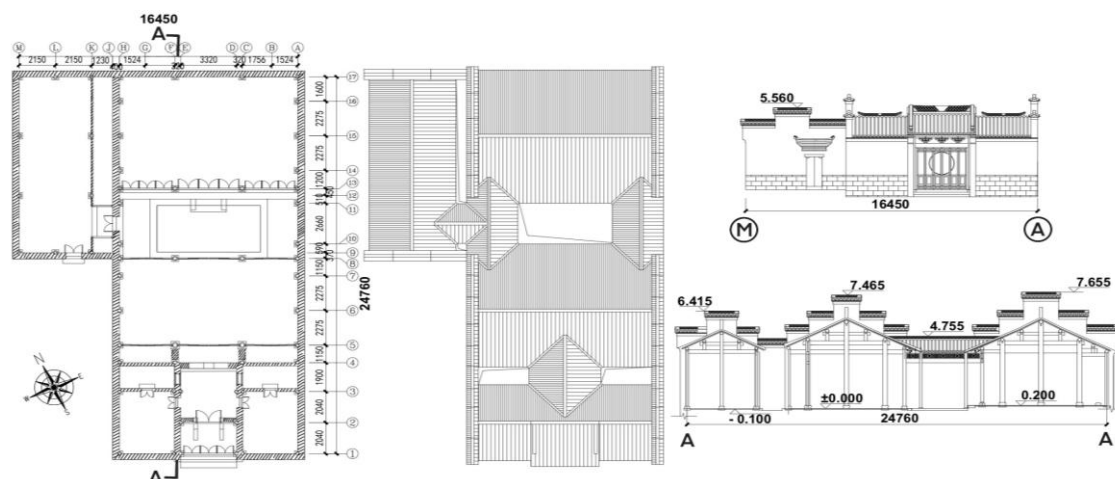


図1 再現した潘氏祠堂の図面(左:平面図 中:上面図 右上:正面図 右下:A-A断面図)

幅 10520mm、門堂の高さは 6415mm である。祠堂の正門は「儀門」(図 2-①、図 3)とも称される。儀門は、黒漆塗りの木製で、高さ 2350mm、幅 1540mm、「十文字扉錠」を使用し、内側から人が開閉する仕組みとなっている。この儀門は正門の外側にある 2 つの「門当」で固定されている。門当(図 2-②)は「抱鼓石」とも呼ばれ、長さ 936mm、高さ 580mm の門当石と半径 355mm の石鼓で構成されている。太鼓の音が、雷のように響き渡ることから、人びとはそれが魔除けに効果があると信じたため、潘氏の門当の形を鼓にしたのだという。門当石の表面に彫られた文様は「蓮華祥雲」(図 4)といわれ、「泥より出でて泥に染まらない蓮の花のように純粋で優雅な家風」を寓意している。蓮は瑞雲に囲まれており、それは潘氏宗族に瑞祥をもたらす願いを表している。

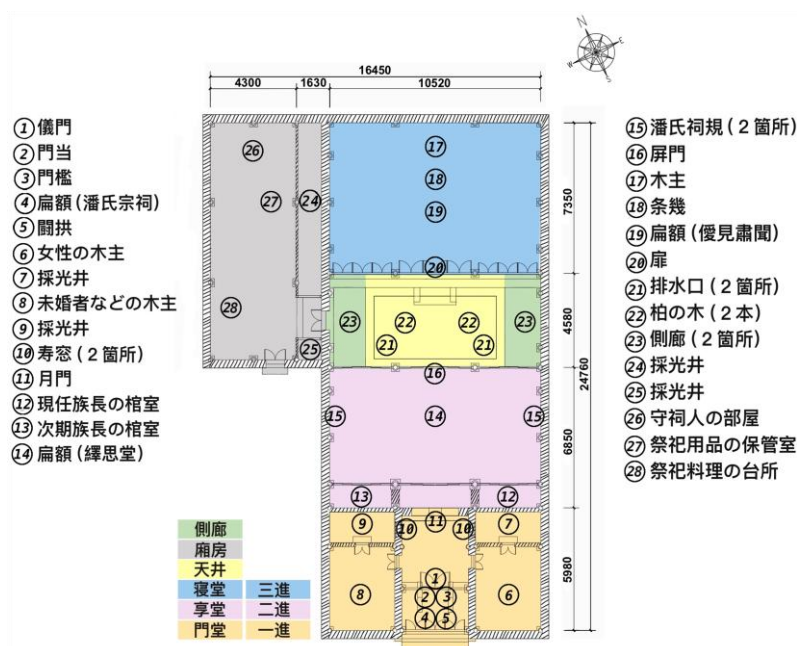


図2 再現した潘氏祠堂の内部分析図



図3 儀門(右→再現図)



図4 門当の蓮華の文様

4. 今後の課題

本研究では、潘氏祠堂の文化的価値の再発見・再認識からはじめ、まず当該地域の人びとに地域振興の実践可能な方策を導出し、今後の内発的な地域再生の起点として、当該地域の持続可能な発展に活用していきたい。